

綴合する4組の敦煌医薬卷子断簡について

沈 澍 農

中国 南京中医药大学医古文教研室

4組の敦煌医薬卷子の綴合作業について報告する。

1. S.9936 + S.11363V

この2点はいずれも卷子本の断簡に過ぎず、その内容は五方に五色の石と五穀を置く処方である。五方に置かれるのはその方角と相剋関係にある石色・穀色である（例えば東方は木であるから、金である白石・白米を置く）。また五方・五石・五穀の内容も基本的に揃っていることから、S.11363Vの前2行行末の文字は、確実にS.9936第2・3行の行首に繋ぎ合わせられる。さらに両者の字様が酷似していること、断簡間の間隔もほぼ一致することから、両者が本来一つの断簡であったことが立証できる。

2. P.3930 + P.5549 (2ヶ所)

P.3930は蝴蝶装の残冊で15枚の半葉が計8折となっており、第6折の左下と第7折右下にそれぞれ方形の欠落がある。P.5549の二つの断簡はP.3930の2ヶ所の欠落部分にびたりと一致し、とりわけ断面で上下に切り離された文字、例えば第6葉の「巴」と第7葉の「塞」、「蒲」などは一つにつなぎ合わせる事ができる。ここから、P.5549の2枚の断簡はP.3930の2ヶ所の欠落部分に各々綴合できる。

3. P.3481 + S.10527

P.3481は『針灸甲乙経』卷四病形脈診第二下から抜粋した文献の断簡とみるべきである。S.10527は僅かに2行残るだけである（馬継興教授は「不知名医方第二十三種残片」と名づけた）。S.10527の2行の内容を検討してみると、明らかにP.3481と密接に繋がり、文字や形式も完全に一致することから、S.10527はP.3481の左上部分が破れて別に分かれたものである。

4. P.3877P1 (前半部) + P.3885V

P.3877P1は従前、敦煌中医薬文献研究において取り上げられてこなかった。検討の結果、P.3877P1の後半部と前半部は繋がらず、前半部はP.3885Vに繋がり、その間のほぼ2行分が失われたことが明らかとなった。

(1) もとの残巻は二つの分断された断簡（前11行、後6行）からなる。前半部に記載される3処方は、中世の方書『刪繁方』系の処方、後半部は「裏衣香方」及び「薰衣香」で内容に関連性がない。よってもとの残巻の二つは無関係である。

(2) P.3877P1残巻の前3行は「治皮実病」の「梔子煎方」（『医心方』の引用は「支子煎方」に作る）に間違いはないだろう。

(3) P.3877P1前半部は敦煌医方卷子P.3885Vに綴合されるべきである。P.3885Vは第2行目から「療髓虚」と「療髓実」の二つの処方が記載されているが、中世の方書である『刪繁方』系の処方である。また第1行の残文は「療脈実方」であると考えられた。ここから二つの残巻に記載された処方（カッコ内は仮称）、すなわち（療皮実諸病方）、療肉虚諸病方、療肉実諸病方、療脈虚諸病方、（療脈実諸病方）、療髓虚諸病方、療髓実諸病方、が明らかとなった。この7首はまさに連続した系統であった。

(4) 2卷子の書式は一致し、両方とも上下の辺及び界があり、毎行約30字である。多くの処方において首字の前に朱筆で“ム”という記号が付けられ、両図版中の「療」「髓」「虚」「実」等の書き方も全く同じである。

以上のことから、この二つは本来同じ文献から分かれたものであることが明らかとなった。